慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	役割期待のズレの研究 : 親子間の役割期待のズレについて
Sub Title	Study on the discripancy between role expectations : an empirical research on the discripancy between role expectations of children and of their parents
Author	関本, 昌秀(Sekimoto, Masahide)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1965
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.5 (1965.) ,p.19- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000005-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

役割期待のズレの研究

——親子間の役割期待のズレについて——

An Empirical Research on the Discripancy between Role Expectations of children and of their Parents

関　本　昌　秀

Masahide Sekimoto

I　序　　論

年々急速な変貌を遂げ，ますます複雑化していく現代社会において，人間の行動——とくに社会行動——を正しく理解し予測することは，非常に困難なことであるが，反面それは大変重要なことであり，また興味深い問題である。行動科学の分野に携わるわれわれにとって，一個の人間として完成された成人の行動を解明することもさることながら，人間誰しもが必ず一度は通る子供から大人への過渡期として，数多くの難しい問題を内包する青年期の複雑な行動を，さまざまな角度からひとつひとつ着実に解明していくことは，また，非常に重要なことである。とくに，昨今のわが国のように，青少年問題が大きくクローズ・アップされてきている社会情勢においては，この分野の研究はきわめて大きな意義をもっているといえる。

青少年問題は，これまでも社会環境，教育環境，家庭環境などの社会文化的観点から，また，人と人との相互作用を中心とした人間関係的・状況分析的観点から，さらに，個人の知的能力やパーソナリティに焦点を合せた心理力学的観点から，さまざまな形で研究のメスが入れられ，幾多の貴重な研究成果を集積してきた。

この小論において報告される研究も，青少年問題，とくに青年期における親子関係の問題を取扱ったものであるが，これは，従来の諸研究にみられるアプローチとは少し角度を変え，役割理論 (role theory) の立場から，親子関係の問題を解明しようとしてこころみられたものである。とくに今回の報告では，現代の高校生とその母親との間にみられる役割期待 (role expectation) のズレの問題に焦点を合せて，その考察をすすめていきたいと思う。

1.1　≪役割≫ 概念の再検討

役割の概念は，個人と社会を結びつける媒介概念として，いいかえるならば，文化，社会構造，パーソナリティ，社会行動の諸変数を関連づける媒介変数として，地位 (status) や座 (position) の概念とともに，今日社会心理学，社会学，文化人類学などの分野で欠かすことのできぬ重要な概念と考えられている。しかしながら，この概念が個人と社会を結びつける有効かつ重宝な概念として，各分野の研究者によって歓迎され，頻繁に活用されるようになった反面，各自がおのれの学問的立場から都合のよいニュアンスを含ませてこれを定義し用いているために，細かくみるとその意味内容にはかなりのバラエティがみられ，それがいろいろと研究上の混乱をひきおこしている。このように役割の概念は，現在までのところ，研究者の間において必ずしも共有的な意味内容をもった概念にはなっていないが，これを大別してみると大体つぎの三種類にまとめることができると思う。

まず第一は，リントン[1]，マクレランド[2]，パーソンズ[3]などの定義によって代表される役割の概念である。これ

1) Linton, R. *The Cultural Background of Personality.* New York: Appleton-Century-Crofts, 1945.
2) McClelland, D. C. *Personality.* New York: Wm. Sloane Associates, 1951.
3) Parsons, T. *Social System.* Glencae: Free Press, 1951.

は「役割という言葉は，ある特定の地位に結びついた文化の型 (culture patterns) の総体を指すものとして用いられる。それ故この言葉は，ある地位を占めるあらゆる人々に対して，社会が課する態度，価値観，行動のすべてを含んでいる。さらにそれは，その地位を占める人々に対して，同一体系内の他の地位にある人々がどんな行動をとるかについて抱く彼等の正当な期待をも含むものとして，広く解することができる。」[4] というリントンの定義によってよく表されているように，役割というものを，それを実際に演ずる個人から全く切り離して，文化的に規定される客観的実在と解する考え方である。つまり，この考え方に従えば，われわれが社会生活を営む場としての社会集団のなかには，さまざまな社会体系が存在する。それらの体系は，たとえその中に含まれる個人が交替したとしても不変的に存続する。個人は各体系のなかでそれぞれの地位（あるいは座）を占める。そして，それらの地位(や座)には，それに対応するところの行動の型としての役割が結びついている。従って個人はその地位（や座）を占めることによって，その地位にふさわしい行動や態度や価値観を要求され，期待される。このように，役割は個人と関係なしに，社会体系の部分を構成する地位にともなって引き出されてくるものである。すなわち，それは地位の動的側面であり，個人が地位を占めるに値するために，ぜひとも果さなければならないところのものである。

リントン等のような文化人類学者や社会学者たちが，どちらかというと役割の構造的側面を強調して，個人を離れた，いわば基本的役割 (basic role……(註) basic personality の basic と類似した意味での basic) といった類のものを《役割》と定義しているのに対して，一方，個人行動を重視する社会心理学者たちは，役割の機能的側面を強調し，同時にそれを個人の現実行動と結びつけて定義していこうとした。このグループに属する研究者たちの典型的な考えは，コトレルやサービンによってなされた定義のなかに最もよく表されている。すなわち，コトレルによれば「役割とは，或る社会状況にある一人の成員がおこなう内的に一貫した一連の条件反応 (conditioned responses) であり，それは同時に，その状況内の他者によって現される内的に一貫した一連の条件反応に対する刺戟を意味する」[5] ものである。また，サービンはコトレルのこのような考えをさらに発展させ，役割をつぎのように定義している。「役割とは，相互作用の場面にある個人によっておこなわれるパターン化された一連の学習された行為 (learned actions) である。個人の行為は，その個人Aが他の個人Bを観察するという知覚的･認知的行動の結果として組織づけられる。個人Bは一つあるいは数多くのバラバラな行為をおこなう。個人Aはそれをみてこれを役割という一つの概念に組織づける。さらに個人Aは，個人Bの行為に関するかような概念化にもとずいて，さらに新しいある種の行為を個人Bに期待する。……(中略)……一方，個人Aは，個人Bの座 (position) と相互的関係にある座に結びつくものとして学習してきたある種の行為をおこなう。これらの行為は個人Aの役割として概念化される。」[6] この二人の研究者によって述べられた定義のなかにもはっきりとうかがえるように，この考え方に立つ研究者たちは，役割というものを，相互作用の過程を通じて個々の行為者に学習された一連の行為の型と解するところに，大きな特徴が見出せる。つまり役割は，個人から離れて存在するものでなく，あくまでも個々の行為者によってとられる現実の行為に関して考えられる概念である。この点が前述の文化人類学者や社会学者の役割概念と著しく異る点である。なお，この立場に比較的近い研究者としては，サージェント[7]，リンデスミスとシュトラウス[8]，キャメロン[9]，ローラー[10]などの名があげられる。

最後にもう一つ，上に述べた二つの役割概念とやや傾向を異にするものとして，ニューカムの役割概念を上げておく必要がある。ニューカムの役割に対する考え方は，これを詳細に検討してみると，決して明解なものとはいいがたいが，少なくとも彼が相互作用理論の見地に立って，役割というものを社会構造(文化をともなう)とパーソナリティの両面から把えていこうとしていること

4) Linton, R. *ibid.* p. 77.
5) Cottrell, L. S., Jr. The Adjustment of the Individual to his Age and Sex Roles. *Amer. Sociol. Rev.*, 1942, Vol. 7, p. 617.
6) Sarbin. T.R. "Role Theory." in Lindzey, G. (ed.), *Handbook of Social Psychology.* Addison-Wesley Publishing Co., 1954, p. 225.
7) Sargent, S. S. "Conceptions of Role and Ego in Contemporary Psychology." in Rohrer, J. H. & Sherif, M. (ed.), *Social Psychology at the Crossroads.* Harper & Brothers, 1951, pp. 355-370.
8) Lindesmith, A. R. & Strauss, A. L. *Social Psychology.* Dryden Press, 1949.
9) Cameron, N. Role Concepts in Behavior Pathology. *Amer. J. Sociol.*, 1950, Vol. 55, pp. 464-467.
10) Lowlor, G.W. Role Theraphy, *Sociatory*, 1947, Vol. 1, pp. 51-55.

は明らかである。すなわち，彼によれば，役割とは生活体(個人)から全く離れて，集合体のレベルにおいて存続するものでもなく，また，相互作用の過程を通じて個人により知覚・認知され，学習され，遂行される一連の条件反応（行動）でもない。彼の考える役割とは，まさにこの両面の要素を吸収したような，あるいは両者を媒介するような概念とみることができよう。ニューカムは，その著「社会心理学」のなかで，役割についてつぎのように述べている。「役割とは，ある座 (position) を占める人々に期待される行動の様式で，その座を占めるすべての人々にとって多かれ少なかれ特徴となっている一連の行動からなる」[11]「従って，役割はある特定の個人の現実行動を指す概念ではない」[12]「人は役割について共有的理解をもつために，ある地位（あるいは座）を占める自分がなにをなすべきかを知覚し，習得し，それによっておのれに対する役割期待 (role expectation) をもつと同時に，他人の行動に対してもその地位からいかなる行動を期待したらよいかを知るようになる。[13]」「ある座を占める個人に対して期待される行動の様式が，その座に結びつく役割の本質をなす。」[14] また，ニューカムはある論文のなかで「役割とは，本来，それを認知する人々が，その役割の結びつく地位を占めるすべての人々にとって，ふさわしいと考える行動の総体を指すものである。」[15] と定義している。以上のように，ニューカムによって考えられた役割の概念は必ずしも明解なものとはいえないが，それが自己ならびに他者に対する役割期待というもの，あるいは期待される行動 (expected behavior) というものに重点をおいて概念化されていることは明らかである。その意味で，彼の役割の概念を役割期待と同義に解しても間違いとはいえないだろう。そして，彼によれば，この役割期待こそ社会構造とパーソナリティを媒介し，統合する有効かつ重要な概念なのである。なおその後，かようなニューカム流の役割概念を継承し，〝役割＝役割期待〟とはっきり定義を下して，実証的研究を進めていく研究者が，数多く現れるようになった。グロス，マッキーチャン，メイソン等[16]，チャータース[17]，ジェンセン[18]，ゲッツェルとギューバ[19]などは，この派に属する研究者といえるだろう。

さて，以上の論述によっても明らかなように，《役割》の概念は，個人と社会とを結びつける統合概念としての素質を充分に備えながらも，いまだその期待に答えられるほど明解な定義が下されておらず，研究者の間においてもその用法についてはっきりした合意が成立していない状態である。そして，このような概念の不明瞭性が，これまで役割に関する実証的研究の発達を阻害してきたと考えられる。筆者は，健全な概念はあくまでも実証概念 (empirical concept) でなければならないし，実験や調査に結びつけられる概念でなければならないと考えており，また，真に価値ある理論は，そこから引出される諸仮説が実証的に検証されるものでなければならぬと信じている。その意味において，役割の概念も，単なる説明概念の段階から実証概念へと脱皮していくことが必要である。いまや役割理論の研究は，言葉の定義をめぐっての概念論争に明け暮れすることを許されるような段階ではない。それが現実にわれわれの日常生活においてどのように作用し，個人や社会の発達にどのような影響を与えているかについて，正しい理解を深めていくことが重要とされている。われわれは，役割の概念や理論を，行動科学の単なる一分野の財産としてではなく，全分野の共有財産として大事に育てていかなければならない。

この目標に近づくため，われわれはいまこの概念を操作的に定義して，多くの実証的研究を積み重ねていくことが必要である。筆者もこの方針にそって，役割の概念をつぎのように定義し，自からの研究を進めている。まず筆者は，役割の概念を単一の概念としてではなく，標準的役割 (modal role)，役割期待 (role expectation)，役割行動 (role behavior) の三つの下位概念からなる綜合概念として考えていくことにした。

標準的役割とは，ある特定の地位（あるいは座）を

11) Newcomb, T.M. *Social Psychology*. Dryden Press, 1950, p. 330.
12) Newcomb, T. M. *ibid*. p. 330.
13) Newcomb, T. M. *ibid*. p. 283.
14) Newcomb, T. M. *ibid*. p. 280.
15) Newcomb, T. M. Role Behaviors in the Study of Individual Personality and of Group. *J. Pers.*, Vol. 16, p. 373.
16) Gross, N., Mason, W.S.. & McEachan, A.W. Role Conflict and its Resolution. in Maccoby E.E., Newcomb. T.M. & Hartley, E.L. (ed.) *Readings in Social Psychology*, 3rd ed., 1958, pp. 447-459.
17) Charters, W.W., Jr. The School as a Social System. *Rev. Educ. Res.*, 1952, Vol. 22. pp. 41-50.
18) Jensen, G.E. The School as a Social System. *Educ. Res. Bull.*, 1954, Vol. 33, pp. 38-46.
19) Getzels, J. W. & Guba, E.C. Role Conflict and Personality. *J. Pres.*, 1955, Vol. 24, pp. 74-85.

占める人々に対して構造的に（つまり人がその地位を占めることによって必然的に）要求され，期待される一連の行動の総体である。しかもそれは，その地位(座)を占める人々の示す最頻(モーダル)的な役割行動から帰納的に引き出されてくる行動の総体である。それは人を離れて，文化的・社会的に規定される客観的実体ではなく，あくまでも人と結びついて存在するものである。従ってそれは，その地位(座)を占める人々の交替によって変化する可能性を含むものである。

役割期待とは，個人がある地位(座)を占めている人々(自分も含めて)に対して期待する，あるいはふさわしいと考える一連の行動の総体である。人はある地位を占めることによって，自分がいかなる行動をとるべきかを期待(認知)し，また，他人が占めている地位から彼のとるべき行動を期待する。自我ならびに他者に対するこのような個人の期待を彼の役割期待と呼ぶ。従って，役割期待は個人のなかに内在し，彼のパーソナリティの一側面を形成している。いいかえるならば，標準的役割が個人に内在化したものが役割期待である。その意味において，役割期待は標準的役割と役割行動とを結びつける媒介概念と考えられる。安定した社会においては，多くの場合，この役割期待は標準的役割と一致する。なお，この概念は，役割知覚（role perception）の概念と多少似たところもある概念である。

役割行動とは，自我ならびに他者に対してある役割期待をもった個々の行為者が，相互作用の場（社会的状況）において現実に遂行する一連の行動を指す。それは，彼のおかれた状況の性格，その状況における彼の役割期待，彼のパーソナリティ(役割期待の側面を除いた)の三者の融合によって産み出された行動である。

さて，以上のように定義された役割の諸概念は，いずれも実証的研究に容易に結びつけられ，操作的にも取扱いやすい概念である。いまわれわれに必要なことは，このような実証概念を用いて，科学的に健全な役割理論を打立てていくことである。

1.2　パーソナリティと役割期待

役割期待の概念を定義した際に，筆者は「従って，役割期待は個人のなかに内在し，彼のパーソナリティの一側面を形成している」と述べた。ではいったい，この役割期待はパーソナリティ構造のなかでどのような位置を占めているのだろうか。これに答えるために，ここでパーソナリティの発達史的構造について少しふれてみよう。

図 1　成人のパーソナリティの構造

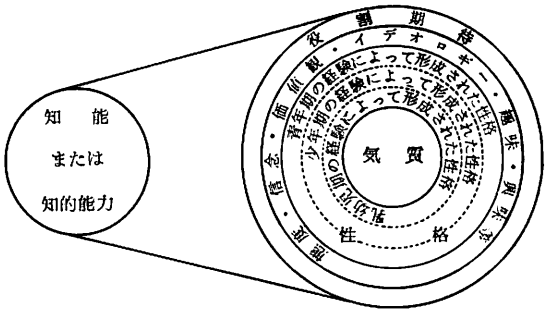


図 1 は成人のパーソナリティ構造を発達史的観点から図解したものである。まず，われわれはこの世に生を受けるとき，性格的に白紙の状態で生れてくるのではない。すでに親ゆずりの遺伝的・生物的な感情特性を担って生れてくるのである。これが《気質》と呼ばれるものであり，人為的にいかんともしがたい性格の一面を形成する。

さて，人間のパーソナリティ（狭義の）はこの気質を中心として，後に環境の影響を受けながらより複雑なものへと発達していく。人間のパーソナリティ形成において最も初期に，最も重要な影響を与えるのは乳幼児期の生活経験である。とくにこの時期における彼の育児の受け方は，その人間が成人となってからのパーソナリティに重要な影響を及ぼしている。気質を基盤にし，乳幼児期の生活経験を通して形作られた幼児のパーソナリティは，少年期の生活経験を通してさらに脚色されていく。この時期における両親や家族の彼に接する態度，遊び仲間の性格，通学する学校の校風，担任の先生のパーソナリティや行動といったようなものは，また彼のパーソナリティの形成に大きな影響を与えている。同様に，青年期におけるわれわれの生活経験のパーソナリティに与える影響力も見逃すことはできない。青年時代に長い闘病生活を送ったとか，苦学しながら大学に通ったとかいったような経験が，その人のパーソナリティの特性に少なからず影響を与えていることは明らかである。

さて，乳幼児期から青年期にいたる間の生活経験を通して形成されたパーソナリティの層を，われわれは《性格》と呼ぶことができよう。だが，パーソナリティは気質や性格だけから形成されるものではない。われわれはそれらの層の上に，その人の態度，信念，価値観，イデオロギー，趣味，興味といったものからなる層を考えなければならない。そして，さらにその表層に，前述のような役割期待というものからなる層を考えることが必要

である。

以上のように，遺伝的に与えられた気質を中心に，乳幼児期の経験によって形成された性格，少年期の経験によって形成された性格，青年期の経験によって形成された性格，態度・信念等，それに役割期待といった具合に層をなして形成された全体（図1の右側の同心円にあたる部分）を，われわれは狭義のパーソナリティと呼んでいる。そして，この狭義のパーソナリティを形成する各層は，表層に属するものほど変化しやすく，逆に中心の層に属するものほど変化しにくい。例えば，人間の気質というものは全く不変的なものであり，これと対照的に，役割期待というものは，その人の占める地位（あるいは座）が変ることによって容易に変化するものである。

さて，われわれがパーソナリティの構造を考える場合，上述のような狭義のパーソナリティと同時に，どうしても人の知的能力の側面を考えなければならない。ここでいう知的能力とは，知能テストで測られるような機械的知能だけでなく，客観的評価能力，洞察力(時間的・空間的見透しをもてる能力)，創造力，自己制御の能力といったような知的能力も含んでいる。ときにはその範囲をもっと拡げて，知識力や技能といったものまでも含めて考える場合がある。この知的能力は，やはり，発達史的にいくつかの層をなして形成されており，狭義のパーソナリティの場合と同じように，比較的変化しやすい面と変化しにくい面とからなっていると考えられる。この知的能力の側面と狭義のパーソナリティの統一体が，広義のパーソナリティと呼ばれるものであり，B=f(P E)〔B……行動　P……生活体　E……環境〕のPにあたる部分の重要な要素となっている。なお，パーソナリティは，発達史的観点からこれを分析的に眺めてみると，上述のように層をなして形成されているとみることができるが，現実の生きたパーソナリティにおいては，これらの各層は完全に統一され，融合されている。

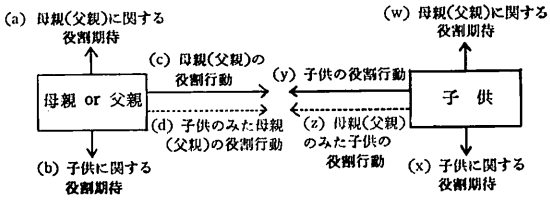
II　本　　論

役割葛藤（role conflict）の問題は，役割理論のなかでも重要な位置を占める問題であり，これまでも多くの研究者によって，さまざまな研究がなされてきた。しかし，それらの研究のほとんどは，人が複数の地位（あるいは座）を占めることから派生する役割葛藤[20]を扱ったものか，あるいは，ある特定の地位を占める人が相矛盾する二つ以上の役割を期待されることによって生れてくる役割葛藤[21]を扱ったものであって，当事者相互間の役割期待のズレ[22]や，標準的役割，役割期待，役割行動相互間のズレに関する問題を取扱ったような研究は，ほとんどといってよいくらい見当らなかった。そこで筆者は，本研究において，これまで研究者の間で見落されてきた役割期待のズレの問題にアプローチすることをこころみた。

2.1　本調査の目的

親子間の役割期待に関する問題は，つぎのような諸側面からこれを取上げることができるだろう。

図 2　調査の概念図式



1)　子供は「父親や母親の役割」「子供の役割」をどのように期待しているか。

2)　父親や母親は「父親の役割」あるいは「母親の役割」，「子供の役割」をどのように期待しているか。

3)　子供が期待する両親の役割と両親の役割行動との間にはどのようなズレがみられるか（上図のwとcあるいはwとdとの関係）。

4)　子供が子供自身に対してもっている役割期待と彼等の役割行動との間にはどのようなズレがみられるか（xとyあるいはxとzとの関係）。

5)　父親（あるいは母親）が期待する子供の役割と子供の役割行動との間にはどのようなズレがみられるか（bとyあるいはbとzとの関係）。

6)　父親（あるいは母親）が父親（母親）自身に対してもっている役割期待と彼等の役割行動との間にはどのようなズレがみられるか（aとcあるいはaとdとの関係）。

7)　子供が期待している「父親（母親）の役割」と

20)　例えば，緊急に解決しなければならぬ重要問題を抱えている課長が，やや遠方に住む恩人の危篤を知らせる電報を受けとったような場合に直面する役割葛藤（すぐ見舞に行くべきか，仕事を片付けるべきかといった役割葛藤）。

21)　例えば，部長に対する役割と部下に対する役割とが相矛盾するため，両者の板挟みになって苦しんでいる課長が経験するような役割葛藤。

22)　例えば，課長と部下の間の場合，自我ならびに他者に対する両者の役割期待がズレていることによって起る葛藤。

父親（母親）自身の期待する「父親（母親）の役割」との間にはどのようなズレがみられるか（w と a との関係）。

8)　父親（母親）が期待している「子供の役割」と子供自身が期待する「子供の役割」との間にはどのようなズレがみられるか（b と x との関係）。

9)　子供の側からみた「父親（母親）の役割行動」と父親（母親）自身からみた「自分の役割行動」との間にはどのようなズレがみられるか（d と c の関係）。

10)　父親（母親）の側からみた「子供の役割行動」と子供自身からみた「自分の役割行動」との間にはどのようなズレがみられるか（z と y の関係）。

さて，この小論では，紙数の都合上，以上のうちから 7) と 8) の側面のみをとりあげ，これを分析することにした。従って，今回報告される調査の目的は，安定型，不安定A型，不安定B型（2.22 調査対象の項参照）の各親子において，母親および子供の役割に対する両者の役割期待がそれぞれどのようなズレを示しているか，その実態を明らかにすることにある。なお，父親に対する調査は未調査のため，今回の報告からは削除する。

2.2　調査の手続

2.21　調査の方法

a)　短時間になるべく多量のデーターが収集できる。

b)　回答者をできるだけスムーズに質問場面に融けこませ，機械的回答の出現するのを阻止する。

c)　集計が容易にできる。

以上の 3 点を比較的よく満たしうる調査方法として，普通の形式の質問紙と insight 形式の質問紙との中間をなすような質問紙を作成し，これを使用した。

この質問紙には，日常高校生の親子関係にとって重要と考えられ，かつ比較的問題の起りがちな15の場面が組み入れられている。質問場面の選定に当っては，事前に青年心理に関する諸文献の調査と作文の分析[23]がおこなわれ，それらの調査資料が参考にされた。最終的に選定された15の質問場面はつぎの通りであった。

Ⅰ　家庭生活に関するもの
　A*　家庭の規律を扱った場面（場面 1）
　B　親の権威を扱った場面（場面 8）
　C　相談相手としての親の態度を扱った場面（場面 13）

Ⅱ　学業・能力に関するもの
　D　勉強への干渉を扱った場面（場面 12）
　E*　成績表の重視を扱った場面（場面 4）
　F　能力の過大評価を扱った場面（場面 9）

Ⅲ　交友関係に関するもの
　G*　交友関係（友人選択）を扱った場面（場面 7）
　H　異性との交際を扱った場面（場面 10）

Ⅳ　余暇生活に関するもの
　I*　趣味への干渉を扱った場面（場面 15）
　J　高校生同志の旅行を扱った場面（場面 3）
　K　クラブ活動を扱った場面（場面 6）

Ⅴ　将来の生活について
　L　将来の方針を扱った場面（場面 2）
　M*　老後の親子の生活を扱った場面（場面 14）

Ⅵ　社会通念に関するもの
　N*　個性の尊重を扱った場面（場面 5）
　O　目上の人への態度を扱った場面（場面 11）

各質問場面は，すべて下記の「質問紙の例」のような形式で構成されている[24]。

（質問紙の例）　　〔場面 8〕

近頃はどこの家庭でも，親子の間でいろいろと意見の衝突をみることが多くなっているようです。ある会合のあとで，高橋さんのお母さん（お父さん）たちは，子供と意見が合わないような場合，親はどんな態度をとったらよいかということについて雑談していました。

イ　高橋さんのお母さん(お父さん)は，子供の意見というのは地につかない理屈が多いのだから，一応はその意見に耳を傾けてやっても，なるべく親の考えに従わせるようにした方がよいという意見でした。

ロ　北条さんのお母さん（お父さん）は，まず子供の意見には耳を傾け，その後で，子供の考えの足りないところや実際の状況にあわない点などを，わかりやすく指摘して，できるだけ親の考えを納得させるようにした方がよいという意見でした。

ハ　八木さんのお母さん（お父さん）は，高校生にもなると，子供もかなりしっかりした考えに基づいて意見を述べるようになるのだから，たとえ自分の意見と反対でも，なるべくそれを，聞き入れてやるようにした方がよいという意見でした。

ニ　下村さんのお母さん（お父さん）は，この問題についてはあまり関心を示しませんでした。

---

23)　作文は「子供に対する父母の態度にひとこと」という表題のもとに書かれた。被調査者約 100 名。

24)　いずれの質問場面も，選択肢にはイ……古い考え方の父親(母親・子供)，ロ……中間の考え方をもつ父親(母親・子供)，ハ……新しい考え方の父親(母親・子供)，ニ……無関心な父親(母親・子供)が登場してくる。

なお，＊印の付してあるA，E，G，I，M，Nの各質問場面は，高校生(子供)にとって日常起りがちな同種の場面に書き換えられ(場面16～21)，子供に関係する役割期待と彼等の役割行動が尋ねられるようになっている。

質問紙と回答用紙は別個にし，回答はすべて回答用紙の方に記入するように指示した。回答用紙に書かれてあるインストラクションは，被調査者に対し，つぎのような点について回答するよう求めている。

〔子供に対して〕 1) 場面1から場面15までの各場面については，「あなたの母親は通常どのような行動をとるか」，また「一般に母親というものは，母親の役割としてどのような行動をとるべきだと思うか」を尋ね，2) 場面16から場面21までの各場面については，「あなたは通常どのような行動をとっているか」，また「一般に子供というものは，子供の役割としてどのような行動をとるべきだと思うか」を尋ねた。

〔母親に対して〕 1) 場面1から場面15までの各場面については，「あなたは通常どのような行動をとっているか」，また「一般に母親というものは，母親の役割としてどのような行動をとるべきだと思うか」を尋ね，2) 場面16から場面21までの各場面については，「あなたの子供は通常どのような行動をとるか」，また「一般に子供というものは，子供の役割としてどのような行動をとるべきか」を尋ねた。

質問紙への回答の仕方は，イ，ロ，ハ，ニの4つの選択肢のなかから，自分の回答に近いものを1つ選ぶ形式になっている。

子供（高校生）に対する調査は，クラスで集団的におこなった。調査は匿名でおこなわれたが，後に隠し番号によって名前を照合できるようにしておいた。母親に対する調査は，家庭訪問による面接調査でおこなった。もちろんこの場合も，調査が匿名でおこなわれることは強調した。なお，調査時間は，子供の場合は50分前後，母親の場合は1時間前後であった。

2.22 調査の対象

a) 調査対象者の選び方：本調査の対象者は，つぎのような手続を経て選ばれた。

1) それぞれ校風に異った特徴をそなえている都内の某有名都立受験高校，某有名都立商業高校，某有名私立大学附属男子高校および女子高校[25]の二年生を対象に前述の質問紙調査をおこなった。各校の調査サンプル数はつぎの通りであった。

	男子	女子
某有名都立受験高校（共学）	73名	37名
某有名都立商業高校（共学）	63名	66名
某有名私立大学附属男子高校（別学）	50名	—
同　附属女子校（別学）	—	91名

2) これらの高校生の調査結果[26]をさらに再分析し，つぎのような三類型に最もよく適合する生徒を，各校より男女各5名づつ，計90名を選出した。

i) 安定型……母親の現実の役割行動(子供からみた)と子供の母親に対する役割期待とが，非常によく一致している生徒

ii) 不安定A型……母親の現実の役割行動が，子供の母親に対する役割期待よりも保守的（あるいは放任な，古い考え方等)方向にズレている場面が多い生徒

iii) 不安定B型……母親の現実の役割行動が，子供の母親に対する役割期待よりも進歩的（あるいは自主性を認める，新しい考え方等）方向にズレている場面の多い生徒。

以上のような基準に応じて現実に選出された各類型の生徒の示す一致度およびズレの度合は，大体つぎの通りであった。

安定型……15場面のうち12～15場面において両者が一致している。

不安定A型……15場面のうち8～12場面において基準の方向にズレている

不安定B型……15場面のうち8～14場面において基準の方向にズレている。

3) 以上のような基準に応じて選出された生徒の母親を，母親側の調査対象者とした。

---

25) 調査対象に選ばれた4校は大体つぎのような特徴をそなえている。

1. 某有名都立受験高校：中流階層の子弟が多く，保護者の職業はサラリーマン，公務員，中小企業の経営者が多い。生徒の卒業後の進路はほとんどが大学への進学で，有名大学への合格率は非常に高い。
2. 某有名都立商業高校：商店経営者や下級サラリーマンの子弟が多く，生活程度もやや落ちる。全生徒の約70%は卒業後就職の道を選んでおり，一流会社への就職率はきわめて高い。
3. 某有名私立大学附属の男子高校および女子高校：中流以上に属する家庭の子弟が多く，保護者の職業も会社経営者，会社役員，高給サラリーマンが多い。卒業生のほとんどは，附属の大学へエスカレーター式に進学していく。

26) これら高校生の役割期待ならびに役割行動に関する全般的な分析結果は，江端澄子，深山美那子両嬢の卒業論文(昭和39年度)「親子間における役割の認知について」のなかに報告されている。

以上のような手続を経て選出された本調査の対象者は，最終的にはつぎの通りであった。

表1　調査対象者

	子　供	母　親
安　定　型	30	30
不安定A型	30	30
不安定B型	30	30
計	90	90

b)　調査対象者の特性：フェース・シートへの回答結果と担任の先生の評価結果から，三類型の生徒の特性を探ってみると，つぎの通りであった。(*印の項目は先生の評価に頼った項目。)

1.　両親の有無とその状況：ほとんど差異なし

2.*　両親の職業の有無とその内容：ほとんど差異なし

3.*　両親の学歴：ほとんど差異なし

4.　PTAの役員の有無：ほとんど差異なし

5.　両親と一緒に過す時間：これは，生徒が父親や母親と話し合ったり，意見を交換したり，雑談を交したりする時間を一週間単位で尋ねたものであるが，三類型の生徒の間には，つぎの表に示すような差異がみとめられた。(父親に関しては省略)

表2　母親と一緒に過す時間　　(人数)

	0～7 時間 (1時間未満)	7～21 時間 (1～3時間)	21時間以上 (3時間以上)
安　定　型	2	16	12
不安定A型	11	17	2
不安定B型	11	14	5

註1.　(　)内の数字は1日平均の時間
註2.　安　定　型：不安定A型　P<0.01
　　安　定　型：不安定B型　P<0.01
　　不安定A型：不安定B型　有意差なし

6.　同胞内の地位(長子，末子，一人子等)：ほとんど差異なし

7.　生育地：ほとんど差異なし

8.　学校ならびに学級委員の有無：ほとんど差異なし

9.*　学業成績：不安定A型の生徒において，成績の劣るものがいくぶん多くみられるが，統計的な有意差はみとめられない。

10.*　素行：担任の先生に三類型の各生徒を「非常によい子」「まあよい子の方」「普通」「まあ悪い子の方」「非常に悪い子」の五段階に評価してもらった結果，これらの生徒の間に下の表に示すような差異がみとめられた。

表3　素　　行　　(人数)

	非常によい子	まあよい子の方	普　通	まあ悪い子の方	非常に悪い子
安　定　型	10	15	5	0	0
	25			0	
不安定A型	2	9	17	2	0
	11			2	
不安定B型	2	13	12	3	0
	15			3	

註1.　有意差の検定に当っては「非常によい子」と「まあよい子の方」を，また「非常に悪い子」と「まあ悪い子の方」を一緒のカテゴリーにまとめた。
註2.　安　定　型：不安定A型　P<0.01
　　安　定　型：不安定B型　P<0.05
　　不安定A型：不安定B型　有意差なし

11.*　家庭の生活程度：ほとんど差異なし

2.23　調査期日

生徒に対する調査期日　1963年12月上旬

母親に対する調査期日　1964年5月上旬～6月上旬

2.3　調査の結果

2.31　母親の役割に対する親子間の役割期待のズレについて： まず母親の役割に対する親子間の役割期待のズレから検討していこう。下記の表4は，そのズレの様子を各場面ごとに表示したものである（調査対象者全員に対する分析結果)。

全般を通じていえることは，母親の役割に対する親子間の役割期待のズレが，非常に顕著に現われているということである。とくに「成績表の重視」「能力の過大評価」の場面においてその徴候は著しい。また，母親のもつ役割期待が，子供のそれよりも保守的（厳格な，古い考え方の）方向にズレているケースが比較的多くみられる場面としては，「成績表の重視」「相談相手」「異性との交際」「家庭の規律」「能力の過大評価」「勉強への干渉」などの場面があげられる。一方，「能力の過大評価」「親の権威」「クラブ活動」などの場面では，その反対方向のズレを示すケースも多くみられた。

つぎに，前述の三類型別にこの分布（イ，ロ，ハ，ニの分布）を検討し，三者のいずれかの間に有意な差のみられた場面をあげてみると，つぎの通りである。

「親の権威」の場面：不安定A型の親子において，「ロ」

表 4　母親の役割に対する親子間の役割期待のズレ

場面 ＼ 役割期待の一致・不一致	家庭の規律	親の権威	相談相手	勉強への干渉	成績表の重視	能力の過大評価	友人の選択	異性との交際	趣味への干渉	高校の旅行同行	クラブ活動	将来の方針	老後の子	個性の尊重	目上の人への態度
イ	53.3	43.3	40.0	40.0	35.5	35.5	52.2	47.8	44.5	55.5	45.5	57.8	54.4	73.3	44.4
ロ	36.7	28.9	42.2	34.4	44.4	35.5	32.2	38.9	32.2	32.2	25.5	31.1	24.4	17.8	28.9
ハ	10.0	27.8	15.5	24.4	20.0	28.9	15.5	13.2	20.0	12.2	26.7	11.1	21.1	5.5	25.5
ニ			2.2	1.1					3.3		2.2			3.3	1.1

註 1.　数字は%を表す。　N＝90。
註 2.　イ……母親の抱く「母親に対する役割期待」と子供の抱く「母親に対する役割期待」とが一致している親子の比率
ロ……前者が保守的（あるいは厳格な）役割期待をもち，後者がそれよりも進歩的（あるいは自主性を認める）役割期待をもっている親子の比率
ハ……前者が進歩的（あるいは自主性を認める）役割期待をもち，後者がそれよりも保守的（あるいは厳格な）役割期待をもっている親子の比率
ニ……その他のケースに属する親子の比率

の型に属するケースが，他の二類型よりも多くみられ「ハ」の型に属するケースが少なかった。

表 5　親の権威

	イ	ロ	ハ	ニ
安定型	16 (53.3)	5 (16.7)	9 (30.0)	0
不安定A型	12 (40.0)	14 (46.7)	4 (13.3)	0
不安定B型	11 (36.7)	7 (23.3)	12 (40.0)	0

安定型：不安定A型　$P<0.05$
不安定A型：不安定B型　$P<0.05$
註 1.　数字は人数，（　）内の数字は%
註 2.　イ，ロ，ハ，ニは表4の註2と同じ
註 3.　検定に際しては，すべて Yates の補正を加え，また「ニ」は除外して計算した。（以下同様）

「相談相手」の場面：不安定A型の親子において，「ロ」の型に属するケースが，不安定B型よりもかなり多くみられ，逆に「ハ」の型に属するケースが少なかった。

表 6　相談相手

	イ	ロ	ハ	ニ
安定型	14 (46.7)	11 (36.7)	5 (16.7)	0
不安定A型	9 (30.0)	19 (63.3)	1 (3.3)	1 (3.3)
不安定B型	13 (43.3)	8 (26.7)	8 (26.7)	1 (3.3)

不安定A型：不安定B型　$P<0.05$

「成績表の重視」の場面：この場面においても，不安定A型の親子のなかには「ロ」の型に属するケースが，他の二類型に比して著しく多くみられ，「イ」や「ハ」の型に属するケースが少なかった。

表 7　成績表の重視

	イ	ロ	ハ	ニ
安定型	14 (50.0)	9 (30.0)	6 (20.0)	0
不安定A型	7 (23.3)	21 (70.0)	2 (6.7)	0
不安定B型	11 (36.7)	9 (30.0)	10 (33.3)	0

安定型：不安定A型　$P<0.05$
不安定A型：不安定B型　$P<0.05$

「能力の過大評価」の場面：この場面では，不安定B型の親子において，「イ」の型に属するケースが少く，「ハ」の型に属するケースが多いということが，特徴となっていた。一方，不安定A型の親子において，「ロ」の型に属するケースが多くみられた。

表 8　能力の過大評価

	イ	ロ	ハ	ニ
安定型	16 (53.3)	8 (26.7)	6 (20.0)	0
不安定A型	10 (33.3)	14 (46.7)	6 (20.0)	0
不安定B型	6 (20.0)	10 (33.3)	14 (46.7)	0

安定型：不安定B型　$P<0.05$

「異性との交際」の場面：不安定A型の親子において，「ロ」の型に属するケースが，他の二類型に比して倍以上も多くみられた。一方「イ」に属するケースが少ない。

表 9　異 性 と の 交 際

	イ	ロ	ハ	ニ
安　定　型	19 (63.7)	8 (26.7)	3 (10.0)	0
不安定A型	10 (33.3)	18 (66.0)	2 (6.7)	0
不安定B型	13 (43.3)	9 (30.0)	8 (26.7)	0

安　定　型：不安定A型　P＜0.05
不安定A型：不安定B型　P＜0.05

「高校生同志の旅行」の場面：この場面では，不安定A型の親子において，他の二類型に比し，「イ」の型に属するケースが少なく，「ロ」の型に属するケースが著しく多くなっていた。また「ハ」に属するケースも少ない。

表 10　旅　　行

	イ	ロ	ハ	ニ
安　定　型	21 (70.0)	5 (16.7)	4 (13.3)	0
不安定A型	11 (36.7)	18 (60.0)	1 (3.3)	0
不安定B型	18 (60.0)	6 (20.0)	6 (20.0)	0

安　定　型：不安定A型　P＜0.01
不安定A型：下安定B型　P＜0.01

「クラブ活動」の場面：安定型の親子に比らべ，不安定A型の親子は，「イ」の型に属するケースが少なく，「ロ」の型に属するケースが著しく多いことが，この場面の特徴となっていた。

表 11　ク ラ ブ 活 動

	イ	ロ	ハ	ニ
安　定　型	18 (60.0)	3 (10.0)	9 (30.0)	0
不安定A型	10 (33.3)	12 (40.0)	6 (20.0)	2 (6.7)
不安定B型	13 (43.3)	8 (26.7)	9 (30.0)	0

安　定　型：不安定A型　P＜0.05

なお，有意差の有無の問題は別として，つぎのような点が各場面を通じて一般的傾向として認められた。すなわち，他の二類型に比して，安定型の親子では「イ」の型に属するケースが多くみられ，不安定A型の親子では「ロ」の型に属するケースが多くみられた。また，不安定B型の親子では「ハ」の型に属するケースが多かった。

2.31　子供の役割に対する親子間の役割期待のズレについて： 母親に関する役割期待の分析につづいて，今度は子供の役割に対する親子間の役割期待のズレについて検討してみよう。表12は表4と同じように，全調査対象者に関して，そのズレの分布を分析し，その結果を表示したものである。

表 12　子供の役割に対する親子間の役割期待のズレ

場面 ＼ 役割期待の一致・不一致	家規庭の律	成重績要表の視	友選人の択	ク活ラブ動	老親後の子	個尊性の重
イ	45.5	42.2	60.0	54.4	66.7	62.2
ロ	45.5	50.0	37.8	28.9	16.7	34.4
ハ	8.9	7.8	2.2	16.7	16.7	3.3

註 1.　数字は%を表す
註 2.　イ……母親の抱く「子供に対する役割期待」と子供の抱く「子供に対する役割期待」とが一致している親子の比率
ロ……前者が保守的，厳格な役割期待をもち，後者がそれよりも進歩的自主的役割期待をもっている親子の比率
ハ……前者が進歩的自主的役割期待をもち，後者がそれよりも保守的，厳格な役割期待をもっている親子の比率

この表からもわかるように，子供の役割に対する親子間の役割期待は，母親の役割に対する場合よりも，多少安定しているようであるが，それでも「ロ」の型に属すケースの比率が相変らず高い数字を示している。とくにその傾向は，「成績表の重視」「家庭の規律」「友人の選択」の場面において顕著にうかがわれる。

さてつぎに，また前回の場合と同じように，この分布を三類型別に考察し，類型間に有意差のみられる場面を探してみよう。子供の役割については，つぎの二つの場面において類型間の有意差がみとめられた。

「成績表の重視」の場面：表13にみられるように，不

表 13　成 績 表 の 重 視

	イ	ロ	ハ
安　定　型	18 (60.0)	12 (40·0)	0
不安定A型	8 (26.7)	21 (70.0)	1 (3.3)
不安定B型	12 (40.0)	12 (40.0)	6 (20.0)

安　定　型：不安定A型　P＜0.01
不安定A型：不安定B型　P＜0.05

註 1.　数字は人数，（　）内の数字は%
註 2.　イ，ロ，ハは表12の註2に同じ

安定A型の親子においては，他の二類型の親子に比して，「イ」の型に属するケースが少なく，「ロ」の型に属するケースが多くなっていた。

「友人の選択」の場面：この場面では，安定型の親子において，他の二類型の親子と較べ「イ」の型に属するケースが多くみられ，他方，「ロ」の型に属するケースが少なかった。

表14　友人の選択

	イ	ロ	ハ
安定型	24 (80.0)	5 (16.7)	1 (3.3)
不安定A型	14 (46.7)	16 (53.3)	0
不安定B型	16 (53.3)	13 (43.3)	1 (3.3)

安定型：不安定A型　$P<0.01$
安定型：不安定B型　$P<0.05$
註）註はすべて表13の註と同じ

なお子供の役割に対する親子間の役割期待のズレに関しては，以上の諸結果と関連して，つぎのような傾向がうかがわれた。すなわち，安定型の親子においては，「家庭の規律」の場面を除いて，両者の役割期待が非常によく一致しており，一方，不安定型の親子においてはA型B型ともその一致度は低く，「ロ」の型の不一致を示すケースが多くみられた。ただし，「成績表の重視」の場面においては，不安定B型の親子に「ハ」の型に属するケースが他よりもやや多くみられた。

2.4 考　察

以上の諸結果をみても明らかなように，現代の母親と子供の間には，自分および相手に対する相互の役割期待に著しいズレがみられる。一般的にいって，将来の方針や社会通念といった比較的観念的なレベルのものに近い問題に関しては，かようなズレを示すケースが少ないが，他方，そのほかの身近な問題に関しては，大きなズレを示すケースが多くみられた。とくに，学業や能力についての問題や家庭生活の問題に関しては，その傾向が顕著に現れていた。しかも，かようなズレを示すケースが，安定型の親子の間において少なく，不安定型の親子の間において多くみられるという事実は注目に値する。先にも述べたように，母親と子供のもつ自我および他者に対する役割期待が一致していれば，そこに現れる相互の役割行動(一種の相互作用)もそれにつれて適切なものとなり，その親子関係は安定した状態を示すものと考えられる。今回の調査においては，残念ながら親子関係の安定度について別に改まった調査をおこなう余裕はなかったが，担任の先生の素行評価において，安定型の生徒には高い素行点をもらったものが非常に多く，反対に不安定型の生徒には——とくに不安定A型の生徒には——高い素行点をもらったものが少なかった。もし，生徒の家庭生活における安定性が，学園生活にもそのまま反映されるということが認められるならば，上述の仮説は担任の先生の素行評価の結果によって間接的に裏付けられたことになる。なお，安定型の生徒は，不安定型の生徒に比して，母親と接する時間が著しく長いという事実も，あわせて心にとどめておく必要がある。つまり，相互作用の頻度が高くなればなるほど，相互の役割期待の一致度が高まってくるということが，この事実からいえるようである。

さて不安定型の親子の場合は，安定型の親子の場合よりも，役割期待のズレを示すケースがはるかに多くみられたが，同じ不安定型であっても，A型とB型とではまたその傾向が異っている。すなわち，A型の親子においては，B型の親子よりも，ズレを示すケースがさらに多くみられ，また母親の役割に関しては，そのズレの方向が反対になっている場合が多かった。A型の親子では，どちらかというと母親が子供よりも保守的な（厳格な，古い考えの）役割期待をもっていて，それが親子間の円滑な相互作用を阻害しているようであったが，B型の親子では，逆に母親の方が子供よりも先走って，無理に放任主義的な（進歩的な，新しい考えの）役割期待をもち，それがかえって子供の期待を裏切り，両者の相互作用をおかしくしているようであった。B型の母親が無理に自分に対し放任主義的な役割期待をもとうとしていることは，彼女らが，母親の役割に対しては進歩的な役割期待をもちながら，子供の役割に対しては依然として保守的な役割期待をもっているという事実からも推察できる。とにかく，この調査の結果から考えられることは，母親が自分および子供に対して保守的な役割期待をもつことが悪いということでもなければ，その反対に，進歩的な役割期待をもつことがよいということでもない。要は，自分と子供との間に一致した役割期待をもつことが，両者の関係を安定させるうえで大事であるということである。

以上考察してきたような諸事実は，データーの分析がさらに進み，調査の概念図式の説明のところで述べたような諸関係が多面的に究明された場合，さらに一層はっきりしてくるものと思われる。